

レタスのセル成型苗育苗における播種日、灌水量、育苗期間、液肥散布が苗の性状に及ぼす影響と全自動移植機への適合性を検討した。

1. 灌水量を多くすると、根鉢形成はやや早くなるものの高温・多湿条件下では徒長を誘起する原因となった。また、灌水量を少なくすると地上部の生育は抑制されるものの、地下部は地上部ほどの抑制を受けなかった。
2. 育苗時の液肥施用は地上部の生育促進に有効であったが、地下部の生育にはほとんど影響しなかった。
3. 標準 200 セルトレイにおいて、根鉢強度指数が 90% に達するまでの積算温度は播種日に関係なく 500°C であった。
4. 積算温度 500°C における平均的な苗の性状は、草丈 6~7 cm、葉令 3~4、T/R 比 3~4、LAI3 であった。
5. 根鉢強度指数が 90% に達した時、全自動移植機による移植ミスは 10% 以下となり、この時期を移植の早限と判断することができた。
6. 全自動移植機による移植時の損傷は、セル成型苗の草丈が 7 cm を超えると増加する傾向がみられ、移植ミスも同様に増加した。
7. 育苗中に徒長が生じると、根鉢成型の前に草丈が 7 cm を超えることがあり、全自動移植機への適用期を失うことがあった。今後、より効果的な徒長防止対策技術の開発が望まれた。
8. 本県の主力作型である冬どりレタスには生育収量の確保のため、大苗での移植が有利である。現状の全自動移植機には苗の適用範囲拡大のための改善が望まれた。

キーワード：育苗、セル成型苗、全自動移植機、レタス